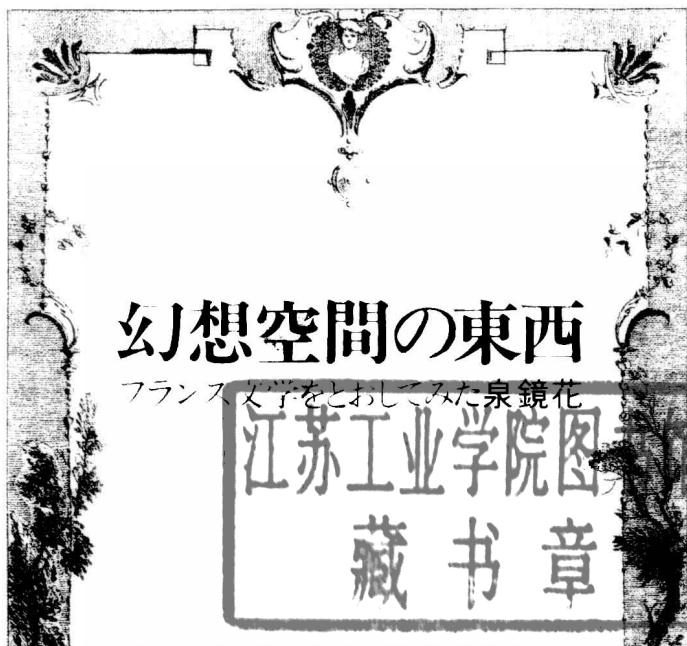


幻想空間の東西

フランス文学をとらえてみた泉鏡花



十月社



JYUGATSUSYA

幻想空間の東西

フランス文学をとおしてみた泉鏡花

1990年1月8日 発行

■編 者 金沢大学フランス文学会
代表 渡辺香根夫

■著 者 平川祐弘
私市保彦
天沢退二郎
篠田知和基
柏木隆雄

■発 行 者 中田 徹

■発 行 所 株式会社十月社
金沢市香林坊2-9-3 〒920
電話0762-61-7444
fax 0762-61-6995
振替 金沢 7-28075

■印刷・製本 株式会社橋本確文堂

©1989, Hirakawa Sukehiro, Kisaichi Yasuhiko,
Amazawa Taijiro, Shinoda Chiwaki,
Kashiwagi Takao Printed in Japan

ISBN4-915665-09-7

幻想空間の東西・目次

幻想空間の東西

平川祐弘……………7

鏡花文学とフランス幻想文学
対比による読解

私市保彦……………33

泉鏡花とアンリ・ボスコ
異人・多神教・他界

天沢退二郎……………99

鏡花の分身幻想

篠田知和基……………127

妖異の語り方

柏木隆雄……………191

泉鏡花とフランス文学

あとがき

渡辺香根夫……………261

幻想空間の東西

フランス文学をとおしてみた泉鏡花

幻想空間の東西

平川祐弘

昭和六三年度の日本フランス語フランス文学会で泉鏡花をシンポジウムにとりあげる、ついでにはパネリストとして参加するように、というお誘いを受けた。私は少年時代のいちばん感じやすい一時期を金沢で過した者なので、いかにもなつかしく、即座に賛同してお引受けした。というのはまず感じたことは「ああ良い企画だ」という印象だったからである。しかしその次に感じたことは、開催地がいかに金沢であるとはいえず、日本仏文学会でのような催しをして筋違いにはならないだろうか、という懸念であった。というのは日本フランス語フランス文学会の機関誌 *Études de Langue et de Littérature Française* はすでに五三号を算えるが、その中に「幻想空間の東西」であるとか「フランス文学を通して見た泉鏡花」であるとかの論文が載ったことは皆無である。フランス文学会は日本フランス文学会であるとはいえず、会員の文化上の帰属は不問に付して、フランスの国文学者と同じようにフランス文学を研究することがタテマエとはいわずとも無言の前提になっている。またそれだからこそ仏文科の出身者の中には、森有正氏をはじめとして、 *appartenance fatale au Japon*（日本に運命的に属していること）などの嘆き節も聞かれたのであろう。

しかしそれらは私見ではあくまでも学問形式上のタテマエであって、日本でフランス文学を学び訳した人は、歴史的に振り返れば、まずなによりも自国の文化を豊かにするためであった。辰野隆も永井荷風も吉江喬松もそうであった。また仏文科に限らず外国文学科の出身者

で日本の文壇や論壇で活躍している人はいそう多い。とくにフランス文学の教授で日本文学の批評家として立派な仕事をした人は過去にも現在にもたいへん多いのが現実であって、泉鏡花についても国文学者の村松定孝氏は『学鑑』一九八八年八月号に次のように書いている。

さて、ここで、どうしても申し添えておきたいのは、鏡花に関してエッセイを書く人は国文畑に見当らなくて、すべて外国文学系の人々に限られているという奇怪な現象である。

村松氏は天沢退二郎氏や寺田透氏、またとくに生島遼一^{*}氏の滋味あふれる鏡花讃美のことなどを念頭において書いているが、私は仏文畑では市原豊太先生の「天才泉鏡花」という文章（昭和二四年、『解釈と鑑賞』、比較文学畑では脇明子氏の『幻想の論理』という修士論文がそのまま講談社現代新書（昭和四九年）として書物となったものを出さずにはいられない。

そのような次第であるから、金沢で日本フランス語フランス文学会主催のこの種のシンポジウムが開かれることは土地柄といい時機といいまことに結構な新機軸といい、なにもわきまえない不心得者であるが、あつかましくも参加させていただいた。それでもなお心配であっ

たから「フランス文学を通して見た泉鏡花」という与えられた題のうち「フランス文学を通して見た」と「泉鏡花」とどちらに重点を置くべきかをその筋におたずねしたところ、お膳立てをした方々はすこぶる明快に「前者である」とのお答えであった。それで一番はじめに巨視的な考察をする役柄を与えられた私はもっぱら主眼を「フランス文学を通して見た」という鏡花文学の背景の解明に力点を置かせていただく。その際たとえばネルヴァルと鏡花との「興味深い類似」など具体例については脇氏にも生島氏にも論があり、このシンポジウムの他の参加者からも後ほどかならずや御指摘があらうかと思われる。それで私は「幻想空間がなぜ東西に共通するのか」という点を主として十九世紀後半のフランスの古代史家フュステル・ド・クラランジュを援用して説明するつもりである。

なおあらかじめお断りするが、私はここではいわゆる影響関係については言及しない。村松定孝氏の近著『あちさる供養頌』（新潮社、一九八八年）を見ると、昭和一三年、鏡花を訪ねた村松氏が西洋小説では、

「メリメが好きです」

と言うと、鏡花は、

「これは、うれしい。こちらもプロスペル・メリメだ」

と言って、そそくさと小走りに隣の部屋へ行って石川剛の訳書『シャルル十一世の幻想』

を持つて来、ぱらぱらと頁を繰って、最後の一節を小声で朗読したそうである。そして村松氏に、

「ねえ、この亡霊が眼前から消えうせたあとに、へただシャルルの上履^{うぶぎ}に一点の血痕をとどめた」なんてところは、巧^ううがすな。なかなか、こうは書けやせんや。こう、こなくっちゃあ……」

と言ったという。村松氏はその時の印象を、

「それは泰西の怪異作家の腕まえに伍して、みずからの技を競う人ならではの気概と共感にみちていた」

と書いている。

そのような鏡花であつてみれば、内外の作家で、これぞと思う人の作は換骨奪胎してわが血肉と化したものは多いにちがいない。須田千里氏の「泉鏡花と中国文学」(『國語國文』一九八六年、第五五卷第一一號)などはその出典をひろく指摘している。^{*2}鏡花がアンデルセン原作森鷗外訳『即興詩人』に想を得て、ローマ、とくにジェンツァノを中心とする『即興詩人』の郷土色の描写をたくみに金沢地方のローカル・カラーの描写に応用し、アントニオまがいの美少年を登場させたことはすでに島田謹二氏によつても指摘されている(島田謹二『日本における外国文学』、朝日新聞社、一九七六年刊、上巻、二七六ページ参照)。そればかりでは

ない、泉鏡花の母親思慕、女性思慕・女性崇拜には西洋、とくにカトリック諸国におけるマリヤ思慕に共通する要素がいかにも多いように感じられる。しかしこの種の影響関係においてはいわゆる放射体（フランスの実証派比較文学で呼びならわしたところの *emetteur*）がないにもフランス文学だけであるとは限らない。そうである以上フランス文学会の席上で放射体の問題を取りあげるのは必ずしも適当であるとは思われない。泉鏡花がアプレイウス原作『黄金のロバ』、その日本語翻案『金驢譚』を愛読し利用したことは倉智恒夫氏にも研究があるが、その種の話題を本席へ持ち出してよいとは考えられない。以上のような諸点を考慮して本席では泉鏡花を「比較文学」*littérature comparée*の対象としてではなく、むしろ「文学的・文化的比較」*comparaison littéraire et culturelle*の「対象」として論ずることにする。

さて先にふれた市原豊太氏の「天才泉鏡花」は筑摩書房刊の明治文学全集の『泉鏡花集』に拾われているが、市原氏はそこで鏡花の特色を次のように上手にまとめている。

鏡花は母を十一歳にして失った。この人は摩耶夫人を篤く信仰してゐた。摩耶夫人は釋迦牟尼佛の生母で、恰も聖母マリヤが穉いキリストを抱いてゐるやうに、小さな佛陀を抱いたり、又はその右の袂から出してゐたりする像を祀るのである。それが金沢の近くの松任にあり、鏡花は母の死後も父に伴れられて参詣し、母を思慕するのであるが、その像は

又鏡花が終生居室に安置して禮拜するところであつた。

更に鏡花は観音菩薩の信仰者でもあつた。岩殿山の観音の靈驗といふものを、鏡花は夫人の重患の折にも、小禽の奇禍の際にも疑はなかつた。この観音や摩耶夫人ほどではなくても、凡そ神佛にかゝはると、鏡花は崇拜信仰しないまでも畏れつゝしむ人であつた。それは結局父祖から傳へられたよきものに對する鏡花の敬虔誠實なる信によるものであり、一方から言へば、すぐれた藝術家たる彼の鋭敏な直観が、粗雑な合理主義には窺へぬ潜在意識の眞を握み得てゐたといふことにもなるであらう。

この種の泉鏡花論に接すると、幼くて母と別れ、母を慕う、という点で小泉八雲ことラフカディオ・ハーンを私は思い出さずにはいられない。周知のように鏡花の作品には妖怪變化がつきものである。そしてその事とおよそ神仏にかかわると崇拜信仰しないまでも畏れつゝしむ事とその態度や心性において關係があることは市原氏の御指摘をまつまでもない。そして日本人の庶民のその種の信仰心をいちはやく認め、日本の妖怪變化をわがものとした西洋人はこれまたラフカディオ・ハーンであつた。

ここで恐縮ながら私事にわたらせていただく。私は小泉八雲に関心があり、当然妖怪變化にも関心がある。泉鏡花については夢幻能の形式との関連でふれたことがあるきりで、とく